

2020年8月30日
聖霊降臨後第13主日
東京聖三一教会

エレミヤ 15:15-21
ローマ 12:1-8
マタイ 16:21-27

わたしがあなたと共にいて助け、あなたを救い出す

司祭 シモン 林 永寅

今日一緒に読んだ福音書の内容は、信仰者にとって疑問を持たせます。それは、弟子の中で一番であるペトロがイエス様から「サタン」と叱られたからです。いったいなぜペトロは叱られたのでしょうか。

まず、どのような状況でこのことが起こったのかを見てみましょう。この出来事が起きたのは、ペトロがイエス様をメシアであると告白した後でした。(先週の福音書の内容です。)イエス様はペトロと弟子たちを頼もしく思われたでしょう。それでイエス様は弟子たちに話しにくいことをおっしゃいました。それは、「ユダヤ人たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」ということでした。このようなイエス様のみ言葉にペトロはいさめて、「そんなことがあってはなりません」と言いました。するとイエス様はペトロに「サタン、引き下がれ」とおっしゃったのです。

信仰者が最も嫌って避けて嫌悪するものがサタンでしょう。しかし、ペトロがイエス様に言ったこの言葉が、サタンという叱責を受けるほどに誤ったものでしょうか。聖書を繰り返して読んでみても、ペトロがそのようにひどく誤ったようには思えません。むしろイエス様が生きて、み言葉をお伝えになり、奇跡を行われるということはイエス様のためでもありましたし、弟子たちと多くの人々のためでもあったと思います。なぜイエス様はこのようにひどいことをおっしゃったのでしょうか。

そしてイエス様はペトロを叱責なさった後、弟子たちにこのように非常に負担になることもおっしゃいました。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(24)

またこのようにもおっしゃいました。

「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」(25)

一言で「死ぬ覚悟をしてからイエス様に従いなさい」という意味でしょう。イエス様はなぜこのように負担になることをおっしゃったのでしょうか。

弟子たちは幸せになるため、心の安らぎを得るため、慰めと癒しを得るため、力を得るためにイエス様を訪ねました。私たちも同じです。幸せ、慰め、癒し、勇気を得るために信仰生活をしています。しかしイエス様はなぜ「死ぬ覚悟しながら信仰生活をしなければならない」とおっしゃったのでしょうか。イエス様のおっしゃる通り、かけがえない大切な命です。けれどもイエス様は、「命を失う者は、それを得る」とおっしゃるので混乱したりもします。皆さんはイエス様のこのみ言葉についてどう思われますか。

私たちにとっては、弟子たちにおっしゃったイエス様のみ言葉をもう少し注目する必要があります。イエス様は、「殺され、三日目に復活する」とおっしゃいました。イエス様のみ言葉の中に強調されているのは「殺される」ということではなく、「復活する」ということです。けれどもペトロは「殺される」という言葉だけに注目しました。「復活する」という言葉に注目したのなら、敢えてイエス様に「そんなことがあってはなりません」と言うわけがありません。それでは、なぜペトロは「殺される」という言葉だけに注目したのでしょうか。それは、もしかしたら「死についての恐れ」のせいかもしれません。恐れとは、耐えがたい辛い出来事が起きそうになった時と、起こった時に感じる不愉快な

情緒的反応のことでしょう。ところで、心理学者たちは、「人々が感じる恐れは、ほとんど無知のせいに起こる」と言います。知らないから恐れるということです。死は知らない世界であり、経験することもできないからさらに恐ろしく感じられるでしょう。

ギリシアの哲学者ソクラテスについての話を短くご紹介させていただきます。ソクラテスは人々に、何が価値のある人生なのかについて教えました。ところが、ソクラテスが有名になると、ねたむ人も多くなりました。彼らはソクラテスを告発しました。それは、「ソクラテスが、国家が信じる神々とは異なる神々を信じ、若者を墮落させた」というのでした。この告発は嘘だったのですが、陪審員たちは有罪を判決しました。ソクラテスは毒の入ったぶどう酒を飲まなければなりません。判決が間違っていると思った友人はソクラテスに逃げることを勧めました。しかし、ソクラテスは断固として拒んで、このように言いました。

「死を恐れることは、賢明でもないのに、自ら賢明であると思いこんでいるのにすぎない。それは、自分が知りもしないことを知っていると思っているのである。人々は誰も死について知らないくせに、それが最も悪いことであると思いながら恐れている。これは無知である。」

ソクラテスが言ったように、人々は死についてよく知らないくせに死を恐れます。ペトロがイエス様をいさめたのも同様でした。ペトロは死を知らないくせに死を恐れました。それだけではありません。イエス様が弟子たちに「キリスト者の人生は死で終わるものではない。必ず復活する」ということを教えてくださいました。それにもかかわらず、弟子たちは復活についての確信がなかったです。それでペトロがイエス様をいさめ、その結果イエス様から「サタン、引き下がれ」という叱責を受けました。

イエス様のこのみ言葉によれば、サタンというものは他でもない「神のことを思わず、人間のことを思っている」ことです。これを考えてみると、「神のこと」と「人間のこと」に対する混乱は誰にとっても起こり得るものです。ですから余計慎重にならざるを得ません。使徒パウロは、今日と一緒に読んだローマ書を通してこのように勧めています。

「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」(ローマ 12:2)

それでは、神様のみ心をどのようにしたらわきまえることができるのでしょうか。使徒パウロはローマ書第 8 章を通して、「肉に従って歩む者」と「霊に従って歩む者」としてわきまえ、私たちが「わきまへの知恵」を持つことができるように示してくれました。「肉に従って歩むこと」はこの世のことに倣って生きることです。そしてこの世の人々が価値を置く富、名誉、自己誇示を追い求めることです。神様に認められることより、人に認められていたがることです。しかし、「霊に従って歩むこと」は、神様のみ旨と善いことはどんなことなのかを深く考え、神様が喜ばれることを行うことです。人間の歴史の本に記されることより、「命の書」(フィリ4:3)に記されることを追い求めることです。それゆえに「肉に従って歩むこと」と「霊に従って歩むこと」のうち、どちらの方が私たちを永遠の命に導いてくれるのか、あえて説明する必要はないでしょう。

パウロは、今日と一緒に読んだローマ書をとおしてこのように強調しました。

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただきなさい。」(ローマ 12:2a)

そして、「霊に従って歩む人生」、「心を新たにして自分を変えていく道」として、「自分を過大に評価せず」、「信仰の度合に応じて慎み深く評価すること」を勧めました。けれども、「霊に従って歩むこと」や「心を新たにして自分を変えていくこと」はとても大変なことです。理解すると言っても、人生の中で完全に実践することは容易ではありません。わたしも同じですからいつも悩んでいます。けれどもその時ごとに努力しようと思います。それは、勇気を

出して努力すれば、神様が助けて下さると信じているからです。ですから皆さんもいつも勇気を出して努力してみてください。このような勇気と努力は必ずわたしたちを命の道に導いてくれるでしょう。そして神様は、努力している私たちの姿をご覧になって励ましてくださるでしょう。今日と一緒に読んだエレミヤ書にはこのように記されています。

「わたしがあなたと共にいて助け、あなたを救い出す。」(エレ 15:20b)

ですから、このみ言葉に頼り、「霊に従って歩む人生」、「心を新たにして自分を変えていく道」に向かって一歩ずつ前に進んでいきましょう。神様は必ず私たちを「堅固な青銅の城壁」(エレ 15:20a)にしてください。 「霊に従って歩む者」は、恐れに打ち勝ち、嬉しく平和の内に過ごすことができます。

この一週、心を新たにして神様のみ前に進み、豊かな祝福と恵みを受けられますように心からお祈りいたします。